

論文要旨

氏名	戸谷孝洋
タイトル (日英併記)	Examination for factors involved in oral health-related quality of life on the elderly requiring long-term care (要介護高齢者の口腔関連 QOL に関する因子の検討)
論文の要旨 (日本語で記載)	
<p>近年、歯科医療のアウトカム評価において、口腔関連 QOL (Quality of Life) が患者立脚型の評価指標として重要視されている。この口腔関連 QOL は、口腔機能以外の様々な要因から影響を受けることが明らかになってきているが、特に要介護高齢者における口腔関連 QOL については不明な点が多い。そこで本研究は、要介護高齢者における口腔関連 QOL に影響する因子を明らかにすることを目的として行ったものである。対象は特別介護施設に入所している要介護高齢者 48 名とし、その中で自記式調査に回答可能であった 18 名 (女性 15 名, 男性 3 名, 平均年齢 84.8 歳) について分析を行った。口腔関連 QOL の評価には Oral Health Impact Profile (OHIP) の短縮版である OHIP-14 日本語版 (OHIP-J14) を用いた。口腔内に関連した項目として、アイヒナーの分類を用いた咬合支持域、山本式総義歯咀嚼能率判定表を用いた咀嚼能力、柿木の分類を用いた口腔乾燥の状態を評価した。また、全身に関連した項目として、日常生活自立度 (障害度, 認知度) を評価した。アイヒナーの分類および日常生活自立度は数値に変換した後、項目ごとの相関を重回帰分析にて評価した。口腔内に関連した項目のうち、咀嚼能力と OHIP 値に対して負の相関を示す傾向が認められ、咀嚼能力が高いほど、口腔関連 QOL が良好であることを示していた。アイヒナーの分類による咬合支持域の評価および口腔乾燥度は OHIP 値との間に相関を認めなかった。また、咬合支持域は咀嚼能力との間にも相関を認めなかった。一方、日常生活自立度 (寝たきり度) は OHIP 値との間に相関を認めなかったが、日常生活自立度 (認知症度) は OHIP 値との間に有意な正の相関を認め ($p=0.0069$), 認知症度が高いほど、口腔関連 QOL は低い結果となった。</p> <p>今回、咀嚼能力と OHIP 値との間にある程度の相関を認めたことから、要介護高齢者においても咀嚼能力は口腔関連 QOL に関する重要な因子であることが明らかになった。一方、咬合支持域と OHIP 値との間に相関が認められなかったことについては、咬合支持域の喪失が認められる被験者の多くは可撤性義歯を使用していたため、天然歯の咬合支持域が減少しても補綴装置によって咬合支持が回復され口腔関連 QOL が維持された可能性が考えられた。また、日常生活自立度 (認知症度) が高いほど、口腔関連 QOL が低下していることが明らかになり、認知症度の高い患者に対しては、積極的な歯科治療や口腔ケアの介入が口腔関連 QOL の維持向上に重要であることが示唆された。</p>	